

[その他]

高田養護学校ひすいの里分校との交流教育を核にした学級経営

- 誰にでも優しく接することのできる児童を目指して -

多田 歩美*

1 はじめに

学級経営の中で一番大切にしなければならないこと、それは、教師はもちろん、児童が「誰にでも優しく接することのできること（思いやりの心をもつこと）」であると考えている。それを育むための手段として最も有効なのが交流教育だと考える。交流教育とは、特殊教育諸学校や障害児学級に在籍する障害児と通常の学級の健常児とが教育活動の一環として活動を共にする教育のことである。

以前、私が非常勤講師として勤務していた上越市立大町小学校では、交流教育が盛んに行われていた。そこでは、児童が「障害児学級の子は障害児学級の子」と考えないで「同じ学校に通っている友達」と認識し、助け合いながら自然に関わり合っていた。特に、障害児学級の児童がいる交流学級でそのような姿が多く見られた。全教職員が、障害児学級の児童のことをよく理解しており、率先して声をかけていた。障害児学級の児童を核にして、学校全体が温かい空気に包まれているように見えた。大町小学校の児童は、障害児学級の児童と交流することによって、障害のある人のことを知り、関わり合いながら思いやりの心を育てていた。そして、障害のある児童に思いやりの心をもって接することができるように、他の児童にも優しく接していた。これらのことから、交流教育は児童にとって必要不可欠で、とても大切な教育だと言える。

平成16年、6月に公布された障害者基本法の一部改正法により、障害のある児童生徒と障害のない児童生徒との交流及び共同学習を積極的に進めることによって相互理解を促進しなければならない旨（第14条、第3法）が規定された。教育課程審議会答申では、「障害のある幼児児童生徒と障害のない幼児児童生徒や地域社会の人々とがともに活動し、互いにふれあう機会を設けることは、すべての幼児児童生徒にとって豊かな人間性や社会性を育む上で大きな意義があるとともに、地域社会の人々が障害のある幼児児童生徒とその教育に対する正しい理解と認識を深める上で極めて重要であり、このような観点から交流教育の一層の充実を図る必要がある。」¹⁾と述べている。

また、文部科学省は、交流教育について「子どもたちの思いやりの気持ちをはぐくんだり、地域の人々が障害のある児童やその教育について理解を深めたりするよい機会となっている。」²⁾と述べている。

そして、近年では、一般社会の中で障害者と健常者が共に生きていくという「ノーマライゼーション」も、国際的に広まってきている。

これまで、交流教育の実践は多数なされ、その効果や実践上の課題が蓄積されている。そこでも、「交流教育は、自分と障害のある人の中に多くの共通点を見いだして、仲間意識をはぐくみ、また、障害のある人たちの障害を克服する意欲に触れて、自分たちの生活や学習の姿勢を見つめ直したりする尊い機会となるものである。また、幼児や高齢者を含めて社会を構成しているすべての人々に対して、思いやりの気持ちを育てる活動の場でもあると言えよう。」³⁾と、交流教育によって思いやりの心が育つことが述べられている。ただし、実践研究の多くは、障害児のコミュニケーション能力や社会性の伸長を目指した、障害児学級の側からのものであり、交流する通常学級の児童の具体的な変容が述べられているものがなかった。私は私が担任している通常学級の学級経営の中核に、交流教育を据えて推進することにより、児童がどのように変容するかについて研究することにした。

当校には、障害児学級が2クラスあるのにもかかわらず、その在籍が3名と少なく、私が担任してきた学年やクラスに障害児学級から交流する児童もいなかったため、障害のある児童とかかわる機会がほとんどなかった。しかし、平成17年度から、当校内に県内で2校目となる普通小学校内の養護学校の分校が併設されることになった。この開校に伴い、当校では在校児童のよりよい教育環境の整備、分校児童との有意義な交流などを提言・要望するためにプロ

*糸魚川市立糸魚川小学校

ジェクト委員会を設置した。

これを好機ととらえ、学校レベルでの交流だけでなく、担任しているクラスでもひすいの里分校の児童と交流教育を積極的に進め、誰にでも優しく接することのできる児童を育てていきたいと考え、本研究に取り組むことにした。

2 研究の目的

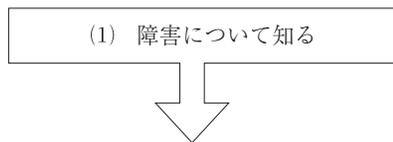
本研究において、交流教育を行った児童の観察や感想から児童の実態や変容を検証し、交流教育を核にした学級経営の有効性を考察する。

3 交流の経緯

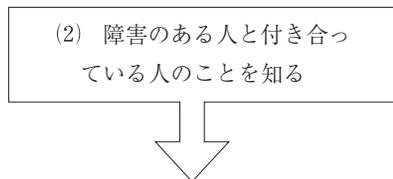
私は、障害のことを理解できていれば、誰もがごく自然に一人の人間として、障害のある人たちとかがわっていきことができると考えている。しかし、自分自身、障害について知らないことが多く、障害のある人と交流する機会が今までないに等しい状態で、そのような人たちとどのように接していけばよいのか分からなかった。大人になっているいろいろな本を読んだり、実際に障害のある人と出会ったりして、障害について学んだ。しかし、交流する時に、何かしらぎこちない自分を感じることがある。そんな時、「もし、幼いころから障害について学ぶことができていたら、幼いころからごく自然に障害のある人とかがわる機会があったら、今以上に障害のある人たちと分かり合えるのではないだろうか。」と考える。

平成17年度から当校に養護学校の分校が併設されることになった。平成16年度から、各クラスで道徳や学級活動の時間に、障害について知識を広げたり、障害のある人の生き方を学んだりすることになった。1年生の担任だった私は、低学年のうちから、障害のある人について学ぶ機会があることは、とてもよいことだと思った。そこで、分校が併設されるまで、そして併設されてから現在まで、次のような流れで実践してきた。

併設されるまで（平成16年度）



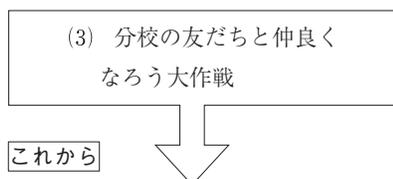
障害のある人はどのような人なのか、児童に理解させるためにビデオを見る活動を取り入れた。そのビデオには、障害のある児童といろいろな交流をしている児童の姿があった。



同和教育副読本「生きるI」の中の「リレーきょうそう」という題材を用い、障害のある人とどのようにかかわっていくことが大切なのかを確認した。もし自分だったら、障害のある人とどのようにかかわっていきたいか書かせた。また、「くさいといわないで」という題材では、相手の気持ちを思いやることの大切さ、偏見をみんなで正していこうとする態度などについて確認した。

併設されてから今まで（平成17年度～）

日常生活では、友達の間違いや失敗を笑ったり冷やかしたりしないように、友達の頑張りや認めることができるよう、日々声掛けをしてきた。



高田養護学校ひすいの里分校の開校式が行われ、児童は初めて障害のある児童を目の当たりにした。1年生の時に障害のある人たちとどのようにかかわっていきたいかを考えさせた記録を持ち出し、分校の友達とどうやったら仲良くなるか考えさせた。児童と話し合い、あいさつと交流給食に取り組んだ。



「3回の交流では、まだ、自分の気持ちを素直に相手にぶつけることのできない生徒が多かった。」⁴⁾と、単発な交流は意味がないということが述べられている文献がある。そこで、あいさつと、休み時間に遊びに行くことを継続的にしている。

4 実践の実際

併設されるまで

(1) 障害のことを知る活動

ビデオを見ることで、視覚的に障害のある人とはどのような人なのかを知ることができた。

(2) 障害のある人と付き合っている人のことを知る活動

また、映像で実際に交流教育をしている様子分かり、児童たちもどのように交流していけばよいのか考えることができた。児童から出た案は次のようなものだった。

- ①車椅子を押してあげたい。
- ②できないことを手伝ってあげたい。
- ③階段を降りられない子がいたらだっこしてあげたい。
- ④休み時間に遊びたい。
- ⑤一緒に給食を食べたい。
- ⑥あいさつをしたい。
- ⑦一緒にゲームをしたい。

このとき、児童たちが考えた交流は、「助けてあげたい」というものが多かった。

道徳の時間に学習した同和教育副読本「生きる I」では、リレー競争をするときに、足に障害のあるてっちゃんが仲間はずれにされたときの気持ちと、てっちゃんを仲間はずしにして1位になったチーム、てっちゃんと一緒にリレーをして3位になったチーム、それぞれの気持ちを考えさせた。次のような意見が出た。

① てっちゃんが仲間はずれにされたときの気持ち

・なんでぼくだけ？ ・かなしいよ。 ・仲間はずしにしないでよ…。

② てっちゃんを仲間はずしにして1位になったチームの気持ち

授業の中で、葛藤を取り入れたため、次のような記述が多かった。

・うれしい。 ・てっちゃんがいなかったから1位になったぞ！ ・勝ってよかった。

このことから、低学年には葛藤をさせるより、教師側から「仲間はずしまでして1位になってもうれしくないよね？」と、言い聞かせた方がよかったと考える。その後、もう一度「本当に仲間はずしにしてまで1位になってうれしかったのかな？」と、児童に問いかけた。すると、次のような記述に変化した。

・でも、てっちゃんが心配だな。 ・てっちゃんにあやまろう。

③ てっちゃんと一緒にリレーをして3位になったチームの気持ち

この気持ちを考えるのは、児童にとって難しいことのようにだった。そこで、その時のてっちゃんの気持ちを考えさせた。

・みんなが仲間に入れてくれてうれしい。

この「生きる I」の学習を通して、児童は「障害のある人を助けてあげたい」という気持ちから、「障害のある人と一緒に活動したい」という気持ちに変化していった。

日常生活では、「友達の間違いや失敗の許せるクラスにしたい！」と考えていた。そこで、私が授業中にわざと間違いをしたり、失敗をしたりした。初めはそれを笑ったり冷やかしたりする児童がたくさんいた。その度に、「今、先生はとっても悲しい気分になったよ。」と話をしてきた。失敗をした児童がいたとき、私が言い聞かせてきたことは「誰だって失敗はあるよ。」ということである。「失敗をしたくて失敗をしたのではないよね。一生懸命頑張っている人を笑うことって、どうなんだろう？」と、いつも問いかけてきた。すると、クラスの誰かが失敗をしても、「間違いは誰にでもあるよ！」と声をかける児童が増えてきた。また、縄跳びがうまく跳べない友達に対しても、初めは「早く跳べよ！」と言っていた児童が「頑張れ！やればできるよ！」と声をかけられるようになり、跳べるようになるまでみんなで応援できるようになった。そして、跳べるようになったときに、みんなで喜びを分かち合う姿が見られた。

併設されてから今まで

ひすいの里分校の開校式に、当学級の児童も参加した。その時の児童の表情は、驚きや不安を隠せない者が多かった。それは、分校の児童一人一人に先生が付いていたり、座っていることができずにうろうろしている児童、式に参加できずにずっと廊下にいる児童、体に器具を付けている児童がいたり……と、ビデオを見たり、道徳の時間で学んだりするだけでは、知ることのできなかつたことがたくさんあったからだ。

そこで、開校式の次の日、児童に次のような話をした。「先生は、目が悪いのでコンタクトレンズをしています(本当はしていないがたとえ話でそう話した)。コンタクトレンズがなければ、何も見えないし、まっすぐにも歩けません。そんな先生と、みんなは同じですか？」と質問した。すると、ある児童が「同じだよ。だって同じ人間だよ」

ん。」と発言し、他の児童も「あ、そっかあ。同じだ。」「うん、同じだ！」と口をそろえた。そこで、「分校のお友達も、先生の目のように、体の中のどこかがうまく動かないんだよ。でも、いろいろな先生が付いていたり、器具を付けたりして、みんなと同じ生活に近づくことができるように頑張っているんだよ。」と話をした。その後、「では、分校の友達とみんなは同じかな？ 違うかな？」と聞いたところ、口々に「同じだ！」と発言していた。

いくらビデオを見たり、道徳の時間で障害について学んだりしても、実際に会ってみなければ本当に障害のことを理解したとは言えないと感じた。児童は、この時初めて障害について理解したと考える。

(3) 分校の友達と仲良くなろう大作戦

1学期始め、学校と分校との交流の取り組みとして、分校の授業見学を行うことになった。学級担任は、見学の前日放課後などに、分校の小学部・中学部の職員の方と簡単な事前打ち合わせを行い、学習のねらい・児童たちの様子・見学の際の留意点・教室内の見学場所の確認などをし、見学をさせてもらった。

私のクラスの児童は、中学部の授業を参観し、作業をする生徒に「何を作っているの？」「すごいね。」「頑張ってね。」などと声をかけていた。また、保健室やトイレなども参観し、当校の保健室やトイレとの違いや、どうしてそのようにする必要があるのかも、質問することができた。廊下の掲示物（歯磨きの仕方・手の洗い方等）に注目し、「分かりやすいね。」と言っている児童もいた。

不安もあったが、児童の柔軟性には驚かされるものがあった。また、分校の先生方の柔軟性にも驚かされた。そこで、「クラス独自の交流をしたい」と考え、併設される前に児童たちと考えた交流の中から、次のことを行うことにした。

① あいさつ

私が学級経営の中で大切にしていることの一つに「あいさつ」がある。学期ごとに行われる「あいさつ調べ」では、クラス全員が「あいさつは大切だ」「あいさつをするといい気分になる」と答えている。また、「あいさつをすると友達になることができる」と、児童はあいさつをすることが、コミュニケーションにおいて大切であることを実感している。

そこで、1学期の初め、分校の児童にあいさつをすることを提案し、実践することになった。分校の児童だけでなく、分校の先生にも会ったらあいさつをすることにした。児童たちだけに任せるのではなく、私も率先してあいさつをするようにした。

2年生の畑と、分校は隣接している。1学期は畑での活動が多くあり、児童は毎日のように分校の児童と会うことができた。初めは少しもじもじしていたようであったが、私のあいさつに続いて、あいさつをすることができるようになってきた。朝、廊下ですれちがうときに「おはよう。」とあいさつをしたり、帰るときに「さようなら。」と言ったりする児童も増えてきた。

② 交流給食

児童があいさつに慣れてきた1学期の後半、給食を食べに行く活動を提案した。分校の先生方とも相談し、クラスの児童3～4人で分校の小学部に行って給食を食べることになった。また、交流給食に行く子は、「行ってみたい。」という子だけに限定して、「行きたくない」とか「どうしよう……」と迷っている子に関しては、無理強いしないようにした。

交流給食を始めてから、早速「すっごく楽しかったよ～」「Aさんと友達になったよ」と児童は笑顔で話してくれた。また、「休み時間にザリガニのことを紹介する約束をしてきたよ！」と、遊ぶ約束をしてくる児童もいた。交流給食に行くことをためらっていた児童も、教室に遊びに来た分校の児童と楽しそうに遊んでいた。そして、次の日には「給食行ってみたい！」と言ってきた。このようにして、1週間という期間限定の交流ではあったが、クラスの全児童が交流給食に行くことができた。

交流給食の後は、分校の児童に手紙を書く活動をした。次に児童の手紙を紹介する。

○一緒に給食を食べて楽しかったよ。また食べようね。今度は2組にも食べにきてね。

○昼休みに遊んで楽しかったよ。また遊びにきてね。僕たちも遊びに行くね。

このように、「また～しよう」という言葉がたくさん見られた。手紙を書いているときには、「もしかして、漢字は読めないかもしれないから、ひらがなも書いた方がいいかな？」「そうだね。そっちの方がきっと分かりやすいよ！」と、児童から思いやりのある言葉を聞くこともできた。

これから

(4) 継続的な交流

今までの活動は分校の児童と当校の児童が仲良くなるきっかけであったと考える。そこで、今までの活動の中から継続的な交流として、あいさつと休み時間に遊びに行くことを続けることにした。

あいさつは、「おはよう」や「さようなら」は、進んで言えるようになった児童が多いが、それに付け加える言葉（「元気？」とか「また遊ぼうね〜」）などが言える児童は少ない。今まで継続していることを続け、もっとコミュニケーションを取ることができるようにしていきたいと考えている。

休み時間に遊ぶことは、「まだ何となく恥ずかしい。」と言う児童がいたり、児童同士だと意思の疎通がうまくいかなかったりしたこともあり、できるだけ私もついて行き、一緒に遊ぶようにした。初めは私と行かなければ分校に行けなかった児童も、「今日は自分で『遊びに来ました』って言えたよ！」と話してくれるようになってきた。児童たちは、分校の遊具をつかって遊ぶことが多い。風船バレーをしたり、かつらをかぶって踊ったりしている。また、ザリガニなどの生き物を介して交流する児童もいる。1学期、1年生にザリガニの発表会をしたときに作ったザリガニ釣りのおもちゃを分校に持って行き、昼休み時間にみんなでザリガニ釣りをして遊ぶこともできた。

5 結果と考察

今までの交流を通して、児童が以前よりも相手の気持ちになって物事を考えることができるようになってきた。2学期に入って私のクラスの授業を参観した先生のレポートには「まず、クラスに入って温かいぬくもりを直感的に感じました。」「クラスの雰囲気がとてもよく、また学習規律もしっかり身に付いていると思いました。」ということが書かれていた。私から見て、具体的に変容した児童の様子を次にいくつか挙げる。

- ・友達同士のもめごとが減った。(嫌なことを言う児童が減った。)
- ・みんなで一緒に遊ぶことが多くなった。(一人ぼっちの人に声をかける児童が増え、一人でいる児童が少なくなった。)
- ・当番の仕事と学校の仕事が重なったとき、「当番の仕事は私たちでやっておくよ」という声をかけられるようになった。
- ・整列をするとき、どこにならんでよいか分からない児童に「ここだよ」と声をかけることができるようになった。
- ・誰かが失敗や間違いをしたときに、それを責めないで「誰にでも失敗や間違いはあるよ」という声をかけることができるようになった。
- ・勝手な人がいるときに、注意ができる。また、注意された人もそれを受け止めることができるようになってきた。(みんなで、いいクラスにしていこうという気持ちが生まれてきた。)

互いに互いを思いやる心が育ち、互いに優しい言葉をかけ合うことができるようになって、クラス全体が優しい雰囲気になってきた。これは、「はじめに」でも述べたように、「誰にでも優しく接することができること(思いやりの心をもつこと)」ができたことで、学級がまとまってきたと考えている。

また、当校では高田養護学校ひすいの里分校の併設まで、「糸小の教育環境を考える会」という組織を発足し、併設に向けて保護者が障害児教育に理解を深めるために、講演会を行ったり、十日町小学校に併設されている小出養護学校ふれあいの丘分校を視察したりしてきた。しかし、ひすいの里分校の開校を前に、保護者の中でも不安を抱いていた方は少なくない。その保護者の一人が、1学期の保護者アンケートの中で次のようなことを記述していた。

○ひすいの里分校と交流をもつ機会を作っているようで、子どもから楽しい様子を聞くことができます。安心すると同時にうれしくなります。

交流後、児童がその様子を家庭で話をするにより、保護者も学校の取組に理解を示してくれたと考えられる。保護者が学校や学級によい印象をもつことも、児童にとっていい影響になり、学級経営においても大切なことだと考える。

6 これからの課題

交流を終えて、以下の4点をこれからの課題として挙げる。

(1) 男子が進んで交流できるよう、その手立てを考えること

私のクラスでは、女子は休み時間など、抵抗なく交流できる児童が多い。しかし、男子はなかなか交流できなかった。その理由として、女子は教室で遊ぶ児童が多いので、分校の児童と風船バレーをしたり、ダンスをしたり歌を歌ったりすることに抵抗はないが、男子は外で遊んだり、遊具で遊んだり体を動かす運動が多いため、分校の児童の

遊びと合わないことがあることが考える。しかし、ザリガニなど生き物を介しての活動では男子も一緒に交流できた。男子も一緒にできる交流にも、もっと取り組んでいく必要がある。

(2) 各学年にあった具体的な交流教育の手立てを考えること

交流できている学級とそうでない学級の差が激しいことも課題である。特に高学年に、「分校に遊びに行ったりする？」と聞くと、「いや、全然…」と返事が返ってきた。しかし、高学年に低学年と同じ交流をしようとしても、それは難しいことだと考える。高学年には高学年の発達段階にあった、交流教育を行っていく必要がある。また、高学年の発達段階にあった手立てを考えなければならない。

また、自分のクラスだけではなく、この交流を学校全体に広めることが大切だと考える。交流教育の良さや成果を、私のクラスから全クラスに発信していくことが必要である。

(3) 家庭に交流教育のよさを発信すること

児童は下校後、家庭で学校での様子を話している。ひすいの里分校との交流も話していた。私は、児童から家庭に交流の様子が伝わることは大切だと考えるが、さらに学校からも伝えていくことが大切だと考える。私のクラスでは、学級通信を毎週発行しており、ひすいの里分校との交流の様子も伝えてきた。しかし、それは、継続されたものではなかった。そこで、これからも、分校とどのような交流をして、児童がどのように変容してきたのかということ、家庭に具体的に紹介していくことが大切である。そうすることで、家庭内で障害児について話をする機会ができ、家族の障害児についての理解が深まると考える。

(4) 教師が率先して障害児とかかわること

今まで、障害児と接する機会の少ない教師は、私と同じように交流する際に何かしらごちない自分を感じたり、戸惑いを感じたりすると考える。しかし、それはまだ障害児のことを知らないからのことである。障害児のことをもっともっと理解するためにも、教師が率先して障害児とかかわり、障害児について正しく理解することが大切である。教師が障害児と率先して関わる姿を見て、児童も自然にかかわっていけると考える。

7 おわりに

交流教育を続けてきたある学校の文献には、「六年生が書いた文章の中には『一年の時、担任の先生が……』とか、『四年生の時の担任や〇〇（障害児学級の名前）の先生の話を聞いて……』と教師の言葉が障害のある児童に対する見方を変えるきっかけになったと述べている児童がいる。」⁵⁾と述べられていた。「これからの課題」でも述べたように、教師が率先して障害児とかかわり、障害児について理解を深めることや、それを児童に伝えていくことは、交流教育においてとても大切なことである。

また、障害児に優しい学習環境、指導法は、健常児にも優しい学習環境、指導法であると考え。私も授業参観に行ってみて学級や廊下の掲示物、児童に対する教員の接し方など、学ぶべきところがたくさんあった。軽度発達障害、ADHD、LDなどの障害のある児童がクラスの6.3%と言われている今、教員にとっても交流教育は大切な教育である。

最後に、障害児と健常児との壁をなくすと言ってもまだまだなくなっていないのが現状である。教職員全員が、これからの学校のあり方に、障害児とか健常児という区別をしないで、自然にかかわり合うことのできる環境作りを提案し続けていくことが大切であると考え。

〈参考文献〉

- 1) 幼稚園、小学校、中学校、高等学校、盲学校、聾学校及び養護学校の教育課程の基準の改善について（答申）（平成10年7月29日 教育課程審議会）
- 2) 文部科学省公式ホームページhttp://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/tokubetu/010.htm
- 3) 興石順一 「小・中学校等から見た交流教育－かかわり合いを学び、考えるチャンスを探る－」、『季刊特殊教育No.95』東洋館出版社、2000年
- 4) 渡辺千一 「思いやりの心をはぐくむ交流教育」、『季刊特殊教育No.95』東洋館出版社、2000年
- 5) 高井紀子 「全校と触れ合う交流教育の実践」、『季刊特殊教育No.95』東洋館出版社、2000年、18～21pp